

アコとユウ

猫カフェ「にやんにやんランド」の店内はざわついていた。

(わあ……すごいねえ、あの二人)

そこには、やけに目を引く二人組の姿があった。

「お、おまえらっ、こっちに来るな！」

「わあー！かわいいです！ユウくんも猫さんも！」

三匹の猫が自身の体によじ登り、困惑する青年。肩にかかるほどの長髪で、鋭いキレ長の目。グレーのパーカーをはおり、首元にはゴツゴツのシルバーのアクセサリーが光る。その風貌は、世間一般でいわれるところの「ヤンキー」のようであった。そして、その姿を「かわいい」と連呼しながらスマホで撮りまくる女子高生。垂れ目で瞳は大きく、ふわりとしたショートボブが揺れる。

「写真、あとで一緒に見ましょうね！」

「別にいいっての……つてうわあ」

猫の肉球がユウの首元に触れ、思わず間の抜けた声が出る。

「ユウくんのそのネックレスが気になるんじゃないですか」

首もとに下げたそれに猫たちは興味津々のようだ。

「クソッ。一度とつけねえ」

「あはは」

その長髪ヤンキーと女子高生は一見相容れぬように見えたが、二人のまとう雰囲気はとても温かいものであった。

「さすがユウくん…たくさんの猫さんのファンをつくってしまいましたね」

店を出て、ぐーっと体を伸ばしながら、アコは言った。

「うつせ」

「うらやましいです。私のことなんてそこらの通行人みたいな扱いだっただのに。

「ほんと、いつしよに来てくれてありがとっございました。私、こっからずっと来てみたかったんです。テレビとかでよく入ってるじゃないですか。見るたびにいいなっつて。しかもCMに出てる俳優もめっちゃめっちゃかっこよくて！猫の可愛さに加えて二倍お得です！つて、ごめんなさい、しゃべりすぎちゃいました。ユウくんはどうでした？」

「……まあまあだったな」

「えー。100点満点だったって顔に書いてますよ」

「えっ。マジで」

ユウは自分の頬をぺたぺたと触る。

そういうちよつと天然なところがカワイイと内心想いつつ、アコはコウと出会った日を思い出した。

それは、1週間前。6月下旬の、雨の日だった。

傘を叩きつけるほどの、激しい雨。

(ひえっ、傘をさしてても濡れちゃうー)

夕方ドラッグストアでのアルバイトを終えたアコは、薄暗い風のような天気の中、家路を急いでいた。

そのとき、河川敷の一つの物影が目に入った。

「アコ。誰か……いる？」

そこには、背の高い一人の男が佇んでいた。傘もささず、全身ズブ濡れで、うつむき気味の姿勢で胸元に何かを大事そうに抱えていた。

アコは考えるよりもさきにその男のもとへ駆け寄った。泥水をたっぷり吸った河川敷の芝生。アコは自分のスニーカーが汚れることなども全く気にならなかった。

「あいつ、大丈夫ですか？」

「……………」

その男はフードを深くかぶっており、表情はよく見えない。フードのすきまから、アコに気づいたようで、ゆつくり顔をこちらに向けた。まだ若い。むしろアコに近いぐらいの年齢だろうか。

「どうしてこんなところに一人で……。あつ」

アコが男の腕の中を覗き込むと、そこにいたのは小さな猫だった。

「えっ、えっ、もしかして、しんで……」

「だいじょうぶだ。生きてる」

「よかった……」

命の灯があることを知り、アコもほつとする。

「コイツ、最近この辺りでよく見かける奴で……。俺がここ通るたびに鳴いてさ。

野良だし、ずっと無視してたんだけど、今日は全然鳴き声がなくて、気になって見に来たら……これだよ」

一匹の痩せた小さな野良猫。この大雨。傘もささずその猫を抱きかかえる青年。

アコは、この状況と同時に、目の前の青年の人柄をも察した。

「ほおつておけばよいのに……バカだよな、俺も」

男は自嘲気味に笑った。

アコは、拳をギュと握りしめながら、青年を見つめた。

「……アタタはこのあと、どうするんですか」

「え」

「この子を連れていく所とか」

「……………あ。わかんねえや、そういえば」

どうやら、この青年も体が勝手に動くらしい。この後のことは一切考えていなかったようだ。

「じゃあ！私といっしょに行きましょうー」

「はあ？」

「アテがあるんです」

「なんでお前が……。断る。俺が勝手にやったことだ。俺一人でどーにか」

「いいえ！ダメですー」

アコは青年が言い終わるより前に言い切った。自身の傘をグイッと青年の頭上に差し出す。青年は驚いたように、目をぼろくりとさせながら傘を見上げた。

「アタタみたいないいひとは、空の神様がほおっておきません」

「……！」

青年は自分のことは積極的に話そうとしなかった。しかし、名前は「ユウト」だということ、年は十八歳でアコの一つ年上であること、街の外れにあるラーメン屋でバイトをしていることは教えてくれた。ユウくんという呼び方は、呼びやすいからという理由でアコが勝手に決めた。本人は不服そうであったが。

ユウは、学校にはワケがあつて暫く行っていないとボツリと話した。アコは、その深刻そうな表情を見て、彼が教えた以上のことは聞かなかった。

「見怖い見た目のヤンキーが、河川敷で猫を助ける。」

まるでドラマか漫画のワンシーンのようだった。まさか、自分がそういう人に出会うとは……。隣を歩くユウを見ながら、アコはしみじみと思う。今回の猫カフェ企画も、実は猫好きなユウを喜ばせるためでもあった。

「どーした、俺の顔にまたなんか書いてるか」

「あつ、いえいえ！なんでもないです！」

「そういえば、アイツ、大丈夫かな」

「ああ！あの時の猫ちゃんですね。送ってもらった写真がありますけど、見ますか？」

アコはスマホをリュックから取り出し、写真を探しその画面をユウに見せた。

そこには、フサフサとした毛ど、ツルンとした瞳が印象的な健康的な猫の姿があった。

「.....おう」

「元気そうでよかったですよね」

ユウもアコも、猫を飼えない家庭環境のため、アコは同級生を頼った。

「引きとつてくれて、本当によかったです。ネコを飼うプロのおうちですから」

その同級生の親は動物病院の獣医師でもあり、大の猫好きで家にはすでに5匹の猫が暮らしていた。猫の飼い方についてはお手の物で、今回の子猫受け入れについても、快く承諾してくれたのである。

「私の友達ですから、いつでも会いにいきますよ」

「.....ああ」

性格も生きてきた環境も異なるはずなのに、不思議と通し合うものをお互いに感じた。それからというもの、二人はお互いの学校やバイト帰りに会って話すようになっていた。

7月の上旬。アコはバイト終わりにユウと待ち合わせ、一緒に帰っていた。

この二人の時間が、アコにとっては癒しの時間であった。

「それでね、ユウくん！猫カフェイベントはいつにしましょう？前回もらった一回目割引クーポンが締め切りになる前に！」

「いつまで？」

「再来週ですね」

「じゃあ、来週とか」

「おけです！」

「おう」

嬉しそうに語るアコを、ユウはほほえましく見つめた。

「あと、これ！見てくださいー！じゃーん」

アコが自分のスマホを掲げると、シャランと何かが揺れる。

カフェの売店で買った、ねこのしつぽのキーホルダーだ。

アコは白ねこ、ユウは三毛猫デザイン。ユウは恥ずかしいからはじめ断ったが、アコが押し切ったかたちで購入した。

「お・そ・ろ・いですねっ」

「だーもう！それが恥ずかしいんだっつものー！」

「ユウくんはどこにつけてるんですか？」

「絶対言わねえ！つて、あれ…それ……？」

ユウが思わず口にしたのは、アコの学生鞆につけられた、かなり年期のはいったお守り袋だった。

「紐、切れそうだけど、大丈夫か？」

「ああ。これ。だいぶボロボロになっちゃってますから、気になりますよね」

元々はきつと鮮やかな赤色であつたろう。長い期間が経つたためか、色が多少落ち、朱色のような色合いとなっていた。鞆と繋がつている紐も擦り切れて大分細くなっている。

「これ……おとうさんに買ってもらつたんです。……今の」

「え」

最後に付け加えられた言葉に、ユウは思わずアコの顔を見た。

アコの両親は、アコが幼い頃に離婚した。

アコは一度施設に預けられ、数年はそこで暮らしていたが、子どもを授かりたいけれども恵まれなかったという夫婦に引き取られた。それが現在の両親である。母は穏やかで面倒見がよく、父はぶっきらぼうであつたが、優しくつた。母はスーパーのパート、父はタクシーの運転手をしながら家族を必死に養つていた。裕福といえる生活はないが、アコはそれを不幸とは一切思わなかつたし、二人が傷つくことは決して口にしないと決めていた。

自分がほしいものを親にねだることは極力せず、自身のアルバイトでためたお金で買うようにしていた。

「まあ、スマホ代は親に払ってもらつてるんだけどね」

えへへ、アコはと笑う。

「このお守りは、私が今のおうちに来た時に、お父さんが初めて買ってくれたものなんです。」

お守りに記された文字は「笑福招幸」。

「今、学校でも養敵な先生や、いい友達に会えて、恵まれてすごしてるのは、このお守りのおかげかもつて、私は思つてます」

(ユウくん、会えたのも……)

小さく小さく呟いた。

「え？」

「なんでも。つて、ヤダ…私……。この話、ふだん学校でもしないんだよ。

でも、なんでかな。ユウくんには話せちゃつた。

……あんまり聞きたくなかつたよね、ゴメン」

ユウは沈黙の後、口を開いた。

「……そんなことねえよ！実は……俺も……」

「ユウト！」

突然名を呼ばれ、二人はハッと振り向いた。横に、銀色の軽自動車をとまる。

「親父！」

「さっき家に寄ってきたところですよ！そんでお前を見かけたもんだから」

アコは、その豪快さと勢いに緊張しながらも「どちらさまでしょう…」とおそるおそる声をかけた。

「ごめん、びっくりさせて。この人、おれの親父。ガラ悪いけど、一応警察。」

「警察！」

「ガラ悪いと一応は余計だ」

少しヨレた白のシャツに紺色のネクタイ、車の中には栄養ドリンクの空き瓶が何本か見える。少し白髪がまじった髪は、無造作ではあるが、短く切りそろえられていて清潔感が感じられる。まるで、張り込みを終えた後の、現役バリバリの刑事のような風貌だ。

「ユウくんのお父さん、ケーサツなんだ！すごい！」

「だろ？もしユウトがいけないことしちゃたらいつでもタイホしてやるぜ！」

「親父」

「ははっ」

冗談を言い合う姿から、日頃からの関係がアコには伝わった。

また、うまく言葉にできないが、ユウが父を見つめるまなざしにはなにか特別なものが感じられた。

「あ、そこ左にいったところが、おれんち」ユウが指さした方向に見えるのは、木造2階建てのアパート。築四十年は経過していそうな佇まいだ。

「古いところですが」

「おめーがいうな！」

シゲがコッソリとユウの頭を軽くこづく。

「おっと、そろそろ行かないとヤバイわ。今日から夜勤だから、夕飯は自分で作っとけよ！」

「おー」

「あと、男として、ちゃんとお嬢ちゃんを送っていくんだぞ。家まで」

「言われなくても、そのつもりだつーの」

「あ。でもね、お嬢ちゃん……もしもユウトから危険を感じたら、すぐ110番するんだぞー」

「お・や・じ！」

ユウの父は、楽しそうだ。

「じやあなく」

小さくなっていく車を見送った後、ユウは呟いた。

「かみさま、か……」

「はい？」

「お前、はじめて会ったとき、神様がつて話してたけど、じゃあ、親父……いや、シゲさんは、おれの神様つてことになるのかなつて。」

「えっ、それは……」

「シゲさんは、俺の、本当の父親じゃない」

ユウの話に、アコはそのまま静かに耳を傾けた。

「おれ、実は、小学校も、中学校も、高校も、受験で入ったんだ。学校も、習い事も、ずっと親の言う通りにやってた。それが正解だとずっと思ってた。いろんなことをガマンしてさ……。でも、中三くらいから、何がなんだかわかんなくなってきた。」

ユウは、一瞬俯いた。

「なんで自分が生きてるのか……わかんなくなった。塾も、親に秘密で何度もさぼった。やばい奴らともつるんだ。」

そんで、高一のとき、ついにやつちやつてさ」

「やつちやう…？」

「人を殴ったつてこと」

「……………」

アコがこわくなつてしまったかもしれない、と胸がギョつとなりながらも、ユウは話を続けた。

「気が付いたら、おれは狭くて灰色の部屋の中にて、医者、警察、親がいた。」

親は、泣いてた。

アコは黙ってユウの瞳だけを見つめる。

「そのとき俺は、二度と二人は会つてはいけないと思った。」

それっきり、会つてない」

「行き場のなくなった、どーしようもないおれを、シゲさんは引きとつてくれたんだ。今は、いわゆる居候つてやつだ。」

シゲさんと茂森は、県警の少年課所属であつた。県内で一人暮らしをしており、そのアパートに、ユウを招き入れた。ユウは、本来真面目過ぎるほどの性格の子だ。このままユウを放っておけば、自責の念で独りで命を絶つてしまうかもしれないと悟つたからだ。

高校を停学となり、無気力状態となつてしまったユウのために、シゲはアルバイトをすすめた。

「俺の長年の知り合いがやっている店だ」

そこはラーメン屋で、ユウは皿洗い、店の掃除を任された。

ユウの働きぶりは真面目で、すぐに店にとけこんだ。

しかし、罪悪感を引きずっていたことから人目につくのは気が引けたため、ユウの勤務場所
はあくまで厨房の奥であった。

ユウにとっては、稼ぐことが目的ではなかった。そこに居られることそのものが、ユウと
っては救いであった。

自分を受け入れてくれることが。

「悪いな。へびーな話しちゃって……俺のこと、こわくなった？」

試すような、子どものような目でアコを見る。

アコはすぐさま首をふった。

「いーえ。まったくです。むしろ、うれしかったですよ。全部話してくれて。

それに、私もたくさん話しちやいましたし、おあいこです！」

「そっか……」

しばらく沈黙が続いた。

二人はただただ一緒に歩いた。アコの家が見えた。

「じゃあ……ここで」

「はい。」

「また、遊びましょうね」

「ああ」

それぞれの胸の中に、嬉しさや喜びとはまた違う、透明な光が灯ったような気がしていた。

7月の終わり。

アコの学校が終わった後、アコとユウは河川敷で待ち合わせ、ユウが拾った猫の引き取り
先である同級生の自宅に立ち寄りつつ下校した。

シトシトと雨の降る中、二つの傘が並ぶ。

「あのコ、ますます可愛くなってきましたね」

「ああ」

「ユウくんには撫でられるの、大好きそうでしたよね。やっぱりわかるんだなあ、ユウくんの
良さが！」

アコが誇らしげに言う。

「何言ってるんだよ……」

「へへ。つて、あ。そういえば、今何時……」

アコは鞆からスマホを取り出し、時刻を見ようとしたが、

「ない！」

アコは叫んだ。

「えっ」

「お守りが！ ない！」

「学校ではあったのに……。紐が切れちゃったんだ……。どうしよう……」

前にユウに言われたときにすぐに直せばよかった、と今にも泣きそうなアコを、ユウはなんとかなだめようとする。

「学校ではあったんだろ？ ってことはきつといま来た道のどこかにあるはずだ。探してみようぜ。大丈夫。絶対見つかるって」

「うん……」

「いいよ、ユウくん、もう帰ろう」

「くそっ、いったいどこに……」

ユウとアコがお守りを探し始めて2時間が経とうとしていた。あたりはもう真っ暗だ。

ユウのジーンズは葉や泥で汚れ、色がわからなくなるくらいグツシヨリと濡れていた。

「雨も強くなってきたし……」

気付けば、時刻は夜八時半を回っていた。雨の勢いは増し、二人のそれぞれさす傘ほとんど意味をなさない状態となっていた。

「ほんと〜くに、大丈夫！ また別の日にさがそう！」

「……わかったよ」

ユウはしどろしどろ手を止めた。

「わりい。こんな遅くなっちゃった……」

「大丈夫だいじょーぶ。って、あ！ 家に連絡するの忘れてた」

アコがスマホを確認する。

「ヤバっ！ ラインと着信履歴……」

ズラリと並ぶ着信履歴の数。発信先は全て「おとうさん」であった。

「マジで悪いー！」

「なに言っているのユウくん！ 悪いのは落としちゃった私で」

「とにかく、今日は帰ろう」

二人とも疲れ切っていたが、作業をいったん中断し、アコの自宅へと急いだ。

「アコ！」

「こんな時間まで何してたんだ」

アコの家では門限は決まっていなかったが、遅くなりそうな日は必ず連絡していた。連絡を一切せず、こんなに遅い時間に帰宅するのは初めてであった。

「実は……」

「すみません、お父さん。僕が彼女を引き留めてしまいました」

(えっ……ユウくん、なんで……)

「この雨。さらにこんな時間。君には、常識がわからないのか？」

アコの父は頭に血が上り、今にもユウにつかみかかりそうであった。アコはここまで冷静ではない父の姿を見るのは初めてであった。

「ちよっとおとうさん！その言い方……！ちがうの！ユウくんは私のお守りを……」

「ふう……とにかく、帰ってきてくれないか？」

「……」

「ユウくん！」

アコはユウの名を叫ぶが、ユウは一切振り返らず、その場を立ち去った。

「お父さん、少しは話を聞いて……」

「アコ！あんな不良とは一切と関わるな！」

(不良……？)

父が怒鳴ったことよりも、ユウの人柄を決めつける発言を父が言ったことのほうがショックであった。

アコの目に涙が溢れてきた。

ユウくんは「不良」じゃないよ……

なんでそんな言い方するの。

ユウくんはおとうさんがくれたお守りをさがしてくれてたんだよ。

本当に頑張ってくれたんだよ。

ユウくんもひどいよ。自分だけを患者にするなんて。ちゃんと説明してよ……

悪いことなんて何一つしていないのに……

ちがう……

悪いのは、ユウくんに甘えきつてた私だ……

「おい！待つんだ！アコ！」

アコは、ユウを追ひ、暗闇の中へ駆け出した。

＊＊

くそつどこにあるんだ……

アコのお守り。この河川敷の近くにあるはずだ。

(あと、この橋を渡ったつげな……)

河川敷のそばには、幅が2メートルほどの用水路が続いていた、その上には小ぶりの橋がかかっており、地域の住民の散歩コースとなっている。

その橋の手すりに目をやると、ユウの目に何かが止まった。

「あっ！」

水を含む色が濃くなっているが、間違いない。アコのお守りだ。どうやら、偶々拾った誰かが、手すりの上に置いたのだから。

安堵の気持ちで、アコのお守りにユウは手を伸ばした。

「！」

降り注ぐ雨粒による滑りと、かじかんだ手の震えで、お守りは手すり上を滑り落ち、用水路に落下した。

(無くしてたまるか！)

ユウはヤケクソで水路に飛び込んだ。しかし、夜の暗さや激しい雨による水の流れの速さで、なかなか手につかみとることができない。

アコは何年も何年も大事にしているものだ。ぜつたいに俺がこの手で……。

アコには、笑ってもらいたい、ただ、それだけだった。

そのときである。

「ユウくん！」

「あ、アコ！？」

「なにしてるの！」

という叫び声と同時に目の前で水しぶきがあがる。

アコが隣にとびこんできたのである。

「ベカ！お前どうして」

「ユウくんのベカー！」

「おまもりは・・・もういいよ・・・」

ギョっと、濡れそぼって冷たくなったユウのからだを抱きしめる。

「どうして……いつも自分をギセイにするの」

「……人のこといえねーだろ」

「……そうですけど」

アコの全身もびしょびしょだ。

水で重くなった体を引きずりながら、二人は水路から上がった。

東の空が明るくなり、朝が近づいているとわかった。

雨足は次第に弱くなり、薄くなった雲から、ほのかに光が差し込んでいた。

「えへ……ごめんなさい。ユウくん」

「ごめんじゃねーよ……なんでお前まで飛び込んでくるんだよ」

「体が勝手に……」

「あーもうビショビショじゃねーか。なんか、拭くもの……」

ユウは自分の所持品を確認するが、全ての物が水浸しだ。財布の中身を確認すると、中には、水を吸って使えそうもない千円札。幸い小銭があつたので、近くのコンビニで安いタオルくらいは買えそうである。

「アコ、大丈夫か」

「あれ、おつかしいなー、元気なのが自慢なのに」

アコは、全速力でユウを追いかけた疲れと、川の水による冷えにより、フラフラであった。

「ばか。むりすんな。……ん！」

ユウは、しゃがんで、広い背中をアコに向けた。

(ええっ……これは、もしかして、いわゆるおんぶというやつでは……)

「いいですいいです！ユウくんはもっと疲れているのに」

「いいからのれー早くー！」

「……はあい」

「ユウくんには、世界がこう見えるんですね」

ユウと同じ目線になったアコは、そうつぶやいた。しかし、そのアコのつぶやきも、ユウにはほとんど聞こえていなかった。人生初の異性のおんぶ。自分から誘ったとはいえ、かつてない緊張と、冷静さと、動揺が入り混じる初めての感情でいっぱいだった。

雲が消え、広い空が広がってくる。光が降り注ぐ。

「あ……」

朝焼け色の空に、大きな大きな七色の橋がかかった。

「虹だ……」

「うん……。こんな大きな虹、見たの、生まれてはじめて……」

「ねえ。ユウくん」

「ん？」

「ユウくんの背中の上で、こんなキレイな虹が見られるなんて、今の私は世界一幸せ者かもしれない」

「何言ってるんだ……」

ユウの鼓動がますます早まる。

(おさまれ、俺の心臓。)

体は冷たいけど、胸の中は熱いくらいあたたかい。

そんな気持ちのまま、二人は虹の下を通りぬけた。

「もういいです！自分で歩けます！」

「家まで送らせてくれ」

コンビニでお互いの髪や服を拭いた後も、ユウはおんぶ帰宅体制をキープしようと頑なであった。アコを下ろそうとしない。アコは、朝の散歩をしている通行人に見られるのが気恥ずかしくてたまらなかった。

その時、

「アコ！」

「お父さん！」

アコの父だった。

一晩中、二人を探し回ったよゆで、髪は乱れ、シャツは汗と雨で濡れていた。

「よかった……本当に……よかった……」

「すまない……ろくに話もきかず」

「いいよ、もう。このあと、ゆっくりお話しよう」

(……おとうさん。私、あのお守りは無くなっちゃったけど、きつと、もう、大丈夫だよ。だつて……)

アコはユウの背中の熱を感じながら、心からそう思った。

それから2週間ほどがたった。

ユウとアコはいつもの河川敷で待ち合わせをしていた。

「ユウくん！久しぶり……って！

どうしたんですか！その髪！」

「どうしたんだは失礼だろ！」

「あつ、ごめんなさい」

アコは目をそらしたあと、改めてユウを見た。

ユウは伸ばしていた髪をバツサリと切っていた。前髪は眉毛にかからないほどの長さで、後ろ髪もバランスよく切りそろえられている。どう見ても爽やかな好青年であった。

「お前、前あの俳優がカッコイイつつてたから……」

「……？ あつもしかして私が猫カフェのCMのことで話したときの？」

「美容師に、誰かに似せてくれって人生初めて頼んだ」

「キレイな髪だったのに！もったいない」

「……………そうかよ」

ユウがあからさまにションとなったため、慌てて訂正する。

「ごめんなさい！ウソです！超似合ってます」

アコは長髪がよかったと冗談をいながらも、内心は、ユウに心の底からドキドキしていた。

(長髪のユウくんも十分ステキだったけど……)

(今のユウくんも、めっちゃめっちゃカッコイイ…ズルイ……)

元来クールで整っている顔立ちであつたため、短髪が似合っているのはもちろん、何より自分の発言を受けてイメチェンをしてくれたという事実により、驚きと言葉に表せぬ喜びが込み上がった。

「俺……高校はもう行けないってあきらめてたけど……ちゃんと相談してみる。先生にも、親にも。もしだめだったら、高卒の資格が取れる学校に入り直す。学費も自分で稼いでやる！」

「ユウくん」

「自分に、自信をもちたいんだ」

ユウはまっすぐ空を見上げる。

「アコと一緒にいるとき、恥ずかしくない俺になりたい」

街に夕日が落ち、二人の長く伸びる影が河川敷に映る。

「また雨の日に、一緒におでかけしましょうね」

「なんでまた。雨だと色々めんどくせーだろうが」

「いーえ。私気づいたんです。雨の日なら、ユウちゃんとまたあのステキな虹を見られるかもしれないですもん」

(こいつはまたものすごい発言を堂々と.....)

「私の名前、アコじゃないですか」

「？ ああ」

「漢字でどう書くと思いますか？」

「えっ」

「愛の虹って書いて、アコっていうんです」

アコは、小学校低学年の頃、名前の漢字について一部のクラスメイトにからかわれ、傷ついていた思い出があった。

「ようやく、好きになりました。私の名前」

「そうか.....」

「ところでユウくんのユウトはどう書くんですか？ 勇気の勇？ 友達の方？」

「.....っ」

もう一言い淀むユウ。

(ユウの性格上、考えられるのは.....)

「わかつちやったくー」 いたずらっ子のような目でユウを見る。

「ぜったいあの字だ！間違いない。なんとユウくんにぴったりの名前なのかしら！」

「ああもう、それ以上言うな！それに、俺よりお前の名前の方が、お前にすく.....」

「すくく？」

「言えるかよ！」

「えっ」

「あーもう！次にまた虹が出たら言っでやるよ！」

「やったー！楽しみにしてますねー！」

愛虹と優

〜雨が止んだあと〜